

## [031]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7434526>

---

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 31, 2026-03-15. Seminar of Educational Sociology  
Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studiess Kyushu University  
バージョン：  
権利関係：



# 大学運動部活動における継続／退部の選択の社会学

## —X 大学チアリーディング部の凝集性に着目して—

キーワード：運動部活動、大学生、凝集性、規範

九州大学教育学部  
秦 琴音

### 1. 目次

#### 序章

- 第1節 問題の所在
- 第2節 先行研究の整理
- 第3節 本研究の課題
- 第4節 本研究の分析視角
- 第5節 調査方法と調査対象の概要
- 第6節 本研究の構成

#### 第1章 継続という選択の背景

- 第1節 競技特性が生む相互依存的な「楽しさ」
- 第2節 怪我をした部員が継続する理由
- 第3節 凝集性の中で形成される「本気で取り組むべきである」という規範
- 第4節 小括

#### 第2章 継続／退部の選択をめぐる葛藤

- 第1節 部活動を辞めなくなる時
- 第2節 大学生活における優先順位
- 第3節 部の規範の変化と部員の取り組みの差
- 第4節 小括

#### 第3章 退部という選択の過程

- 第1節 規範の内面化と自己選抜
- 第2節 退部を生み出す構造：凝集性の二面性
- 第3節 小括

#### 終章

- 第1節 本研究の知見
- 第2節 本研究の意義

### 2. 概要

現代の大学生は多様な選択肢に開かれており、様々な

場面でライフスタイルの選択を迫られている(小川ほか、2024)。学業やサークル活動、アルバイト等に力を入れる学生がいる中、大学運動部活動に所属する学生にとって、部活動は大学生活の軸になりうるほど大きな影響を与えるものである。そのような学生は、多様な選択肢に開かれた大学生活において、「タテヨコの人間関係」が構成され(山本, 2010)、時間的にも身体的にも大きな負担と拘束を伴う運動部活動にあえて関与し続けていると言える。

大学運動部活動は、学生を中心とした自主的・自律的な運営(文部科学省, 2017, p.16)による課外活動である。大学運動部活動を継続する動機に関する研究では、因子分析から「回避」「達成」「健康・体力」などの因子が示され、やめるにやめられない構造があることや、また個人の行動が集団における対人関係的要因によって規定されることが示唆されている(山本, 1990, pp.113-114)が、その集団における作用がどのような過程で部員の選択に結びつくのかという実態は十分に明らかにされていない。また、大学運動部活動の経験は、社会人に必要なスキルを身に着ける上で効果的であること(金森・蛭田, 2018 など)に焦点があたり、退部に対して否定的な見方があることも示され(尾見, 2019, pp.65-67)、退部の選択や退部者の視点は十分に扱われてこなかった。

そこで本研究では、大学運動部活動における部員の継続／退部の選択を、集団の作用との関係の中で捉えることを課題とし、大学運動部活動の規範や対人関係、集団のまとまりの中で部員がどのような場面で迷い、継続／退部の選択を行っているのか、その過程を丁寧に描き出すことを試みた。その際、大学運動部活動における集団の作用を捉える視角として、「凝集性」を用いた。本研究では、社会学の文脈において Durkheim (1893) の議論から凝集性について扱った秋葉 (2025) の整理を参考にして、本研究の対象である大学運動部活動における凝

集性を、部活動における部員が、部の規律や規範といった社会的要因によって相互依存的な関係を取り結ぶさまであると捉えた。そのような凝集性が見られる X 大学チアリーディング部を対象とし、部員 11 名との半構造化インタビューによる調査で得られた語りの分析を行った。

まず、第 1 章では、X 大学チアリーディング部において、部活動を継続する理由は単なる個人の楽しさや達成感にとどまらず、凝集性の中で、他の部員と成功や達成を共有することや集団の一員として努力すること自体に見出されていることを明らかにした。そこでは、チアリーディングの競技特性に由来する、部員同士の相互依存的な関係が見られ、部活動に「本気で取り組むべきである」という規範が自然なものとして内面化されていた。怪我により競技面での達成感が得られにくい部員も部の一員として他の部員と相互依存的な関係に身を置き、共に部活動に本気で取り組むこと自体に意義を見出していることが示された。

第 2 章では、部員が継続と退部の間で葛藤する場面に注目した。部員の葛藤の契機は、主力チームに入れないことの辛さや怪我の恐怖心が共有できない経験、自主練習への参加状況の差や「楽しさ」の喪失など様々である一方で、それらは部の凝集性のもとで共有される規範や部員間の関係性の中で経験されていることが明らかになった。欠席が部全体に影響を及ぼすことの責任感から自ら部活動を優先し、学業やアルバイトなどの活動との両立の難しさを感じていた。さらに、多くの部員が部活の練習以外でも努力するようになることで、「本気で取り組むべきである」という部の規範の基準が引き上がり、部活動の正規練習に本気で取り組んでいた部員も、相対的に本気で取り組んでいない部員として位置付けられ、部員は部活動の継続について葛藤を抱いていた。

第 3 章では、退部した部員の語りから、部の凝集性が退部を構造的に促す側面を見出した。部員の中で見られる「頑張れる／頑張れない」という線引きによって「頑張れない人」とされた部員は、それを内面化し、自らを位置づけ、部の規範に対する自己選抜を行い、退部を選んでいった。このように、凝集性は集団の規範への適合を通じた自己選抜によって退部を促す力としても作用していることが明らかになった。また、退部した部員は必ずしも退部をネガティブな経験としてではなく、自分が「頑張れる」環境と「頑張れない」環境について知る、自己理解の契機として捉えていることが分かった。

本研究の意義は、大学運動部活動において、部員が部

の凝集性のもとで部の規範を内面化し、部における位置づけや責任を感じながら、継続／退部の選択に至る過程を描き出した点にある。部の凝集性は、部員の継続を支える力として作用する一方で、意図せざる形で規範からの自己選抜によって退部を促す力としても作用していることを部員の語りから明らかにした。また、本研究では、大学運動部活動における継続／退部の選択を、大学生活において「頑張る」経験をどこでどのようにするかという選択として捉えられた。継続している部員も退部した部員も本気で取り組む経験に価値を見出しており、否定的な見解がされてきた退部という選択も、別の「頑張れる」環境で頑張るための選択として理解できる可能性を示した。

これらの結果は、本研究で扱ったチアリーディング部が、一人欠ければその技の練習自体ができない相互依存的な関係と、わずかなミスが重大な怪我につながる危険性を伴う競技特性を有しているため、部員一人ひとりに対して規範がより強く内面化されやすく、凝集性を通じた集団の作用が、継続／退部の選択により明示的に現れたと考えられる。このような競技特性を踏まえ、大学運動部活動における継続／退部の選択の過程を具体的に描き出し、どちらかの選択を価値づけるのではなく、大学生活で「頑張る」経験を求めた上での選択として捉える視点を示した点が本研究のオリジナリティである。

### 3. 主要参考文献

- 秋葉亮, 2025, 「社会的凝集性の系譜—社会学における概念史」岡本智周編著『多様性と凝集性の社会学: 共生社会の考え方』, 太郎次郎社エディタス, pp.62-92.
- Durkheim, Émile, 1893, *De la division du travail social*, Paris: Félix Alcan. (=1971, 田原音和訳『社会分業論』青木書店.)
- 金森史枝・蛭田秀一, 2018, 「大学における正課外活動としての体育会運動部活動の意義—体育会運動部活動を通して何を習得しているのか—」『総合保健体育科学』41 巻 1 号 pp.45-54.
- 山本順之, 2010, 「スポーツの文化の再生産に関する社会学的研究—学校部活動を中心に」『社会文化研究所紀要』66, pp.69-86.
- 山本教人, 1990, 「大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較」『体育学研究』第 35 巻, pp.109-119.
- 文部科学省, 2017, 『大学スポーツの振興に関する検討会議 最終とりまとめ ~大学のスポーツの価値の向

上に向けて～』.

[https://www.mext.go.jp/sports/b\\_menu/shingi/005\\_index/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/005_index/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/03/10/1383246_1_1.pdf)

(最終閲覧日：2026年1月26日)

小川豊武・妹尾麻美・岩田考・牧野智和・寺地幹人・二方龍紀・木村絵里子・木島由晶・羽渕一代・浅野智彦・久保田裕之・辻泉, 2024, 『最近の大学生の社会学：2020年代学生文化としての再帰的ライフスタイル』, ナカニシヤ出版.

尾見康博, 2019, 『日本の部活—文化と心理・行動を読み解く』ちとせプレス.